

# 万葉集に取材した短編漫画の可能性の模索

## —大伴旅人とその周辺人物たちをモチーフに—

みしま ゆかり

### 1 はじめに

縁あって奈良県立万葉文化館の委託共同研究「現代社会における古代文化の二次創作—サブカルチャーが描いた記紀・万葉集—」に2年度目から参加することとなった。クリエイターの立場で参加するということは、研究期間終了時までには、記紀・万葉を題材とした何かしらの二次創作物（漫画、アニメ等）をビジュアル的に企画・提案することが求められる。歴史物の漫画やアニメは普段から娯楽として楽しんでいるものの、自分が創作する側になった経験はなく、古代文化にさほど詳しい訳でもない。まずは情報を収集し、テーマを何にすべきか決めるところから始める必要があった。

テーマ決めにあたっては、以下の点を重視した。

- ・自分自身が興味を持てるか  
(→自分自身が興味を持てるテーマでなければモチベーションを維持できなくなる。)
- ・現代人の価値観で見ても共感できるか  
(→記紀・万葉の中には、現代人のそのままの感覚では受け入れがたい描写も存在する。研究者ではない一般消費者が楽しめる娯楽作品にするためには、現代の価値観でも共感できる題材を厳選するか、表現を工夫する必要がある。)
- ・1年以内にある程度まとまった企画としてアウトプットできるか  
(→あまり壮大なテーマではなく、コンパクトにまとめやすいものを選ぶ。)

なお、公的研究機関の委託共同研究の成果物として発表する以上、たとえフィクションであっても史実と矛盾する表現や、当時の文献資料からみて「絶対にありえない」と言われる脚色は避けてほしい、という研究チームの意向も踏まえてこれに取り組んだ。

### 2 新元号「令和」で俄かに注目を集めた大伴旅人

制作テーマを検討していた2019年の春、新元号「令和」が発表されたことで、その典拠となった「梅花の歌三十二首」の序文の作者とされる万葉歌人・大伴旅人が俄かに世間の注目を集めた。話題性も高いので、大伴旅人、特に梅花宴を描いてはどうか？と代表研究者から提案されたものの、話題性だけでテーマを決めることには抵抗があった。

その心境に変化が生じたのは、2019年度1回目の研究会の際に観覧した館蔵品展「巨匠が残した万葉日本画 ～響き合うことばと絵画～」で「梅花宴」以外の大伴旅人の歌を知った時だった。特に讃酒歌が印象的で、赤い顔で気持ちよく酔っぱらい、部下に絡んで「しょうがないなあ」と笑われたりする、現代にもいる「愛され上司」の姿を想像することができた。以前勤めた職場で、酒に弱いのに酒好きで、でも仕事では皆に絶大な信頼を寄せられるSさんという上司がいたことを思い出し、「あの人をイメージモデルにして大伴旅人を描いてみよう」と決めるに至った。

### 3 ショートアニメ「酒壺旅人くん」

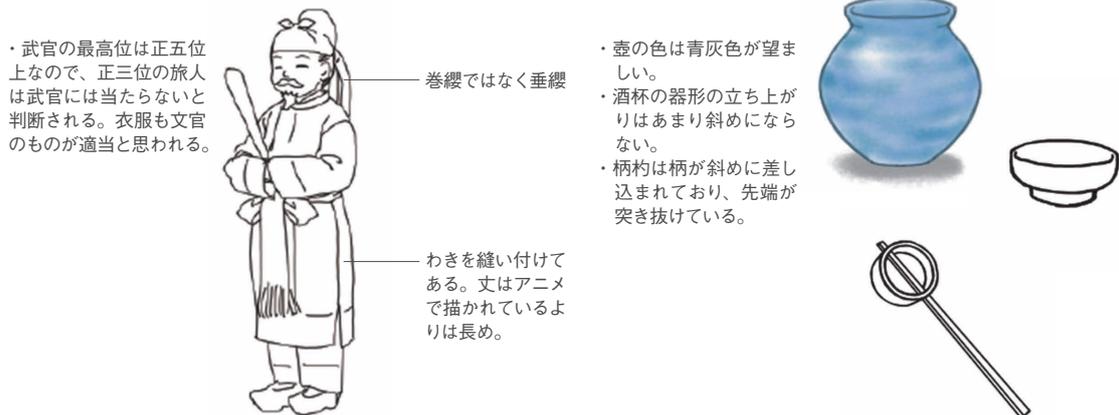
大伴旅人の讃酒歌の一つに「なかなか人とあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ」(巻3・343)がある。中途半端に人であるくらいならいっそ酒壺になって酒に染みていたいという呑兵衛の歌であり、初めて読んだ時には思わず笑ってしまった。

このユーモラスな歌であれば、絵的に面白く、かつコンパクトにまとめやすいと考え、30秒程度の粗いショートアニメの絵コンテを作った。



文字通り、酔った旅人が本当に酒壺になってしまう30秒程度のショートアニメである。しょうもないと言えばしょうもないが、この絵コンテをつなげて作った動画を人に見せると大半の人は笑ってくれるので、企画としては悪くないと思われる。この程度の短いアニメで、1秒あたりのコマ数を少なめにすれば、制作コストもある程度抑えられるのではないだろうか。他にも様々な万葉歌を題材にしてシリーズ化することもできるので、奈良県立万葉文化館の展示コンテンツとしての可能性はあると考える。

なお、このショートアニメを作るにあたり、大伴旅人が武官出身なので武官の衣にするべきなのか、それとも大宰府長官という管理職の立場なら文官の衣にするべきなのか、判断がつかなかった。本来であれば作画に入る前のキャラクター設定の段階で万葉文化館研究員の助言を仰ぐべきだったが、「早く絵を動かしたい」という気持ちが勝ってしまい、つい先に絵を描き進めてしまった。絵コンテができた後のチェックでは、衣装や小物について以下の指摘を受けた次第である。



#### 4 大伴旅人を主人公とした短編漫画

3.のショートアニメ「酒壺旅人くん」は、大伴旅人のユーモラスな一面だけを切り取って表現したものであるが、大伴旅人の関連文献を読めば読むほど、彼をただ「ひょうきんなおじさん」として描いて終わるべきではない、という思いが強くなった。旅人の残した歌には3.のようなユーモラスな讃酒歌もあれば、強い望郷の念を詠んだ歌、妻を失った悲しみを詠んだ歌、自由な空想の世界を詠んだ歌などもある。また、旅人の部下たちの残した歌からも、身分の差を超えた親しみや信頼が感じられ、旅人の人物像についての想像を掻き立てられた。旅人の持つ様々な「顔」は、ストーリー漫画のキャラクターとして魅力を発揮する要素になると考え、大伴旅人とその周辺人物を題材とした短編漫画の企画を立てることとした。

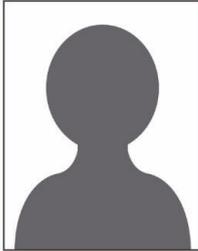
次ページ以降に続くのは、漫画を描くにあたって必要となるキャラクター設定資料である。「史実と矛盾する表現は避ける」という大前提があるので、まずは情報収集から入って漫画のネタになりそうな要素を探し、情報のない部分は想像や創作で補いながら人物像を練り上げていく、という手順をとった。

# キャラクター設定の過程

## おおとものたびと 大伴旅人(1/2)

### ①情報収集

文献資料から確認できる情報を収集。  
その中から漫画のネタやキャラ設定につなげやすい情報を拾い出す。



正三位・大宰帥  
63歳ぐらい  
(728年時点)

### 大伴旅人(665-731)

飛鳥時代から奈良時代の政治家・歌人・詩人。軍事に携わる名門氏族・大伴氏の長。万葉集の編纂に関わったとされる大伴家持の父であり、万葉集に約80首収録されている。新元号「令和」の典拠となった「梅花の歌三十二首」の序文も旅人の作とされている。

略年表	詠まれた歌
665年 大伴安麻呂の長男として生まれる。	
710年 この頃藤原京から平城京へ。	
728年頃 帥として大宰府に赴任。 妻・大伴郎女を失う。(具体の時期は不明)	<b>建て前</b> ・やすみししわご大君の食国は倭も此処も同じとそ思ふ(巻6・956)
6月 「凶問に報ふる歌」を作る。	<b>報凶問歌</b> ・世の中は空しきものと知る時しいよますますかなしかりけり(巻5・793) <b>亡妻挽歌?</b> ・わが岡の秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも(巻8・1542)
729年2月 都で長屋王の変が起こる。 (※旅人は直接関わっていないが…)	<b>望郷</b> ・わが盛また変若めやもほとほとに寧樂の京を見ずかなりなむ(巻3・331) ・わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため(巻3・332)
10月 藤原房前に「梧桐日本琴の歌」を贈る。	<b>空想</b> ・如何にあらむ日の時にかも声知らむ人の膝の上わが枕かむ(巻5・810) ・言間はぬ樹にはありともうはしき君が手馴れの琴にしあるべし(巻5・811)
730年1月 大宰帥邸にて「梅花の宴」を開く。	<b>自然</b> ・わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも(巻5・822) <b>望郷</b> ・わが盛りいたく降ちぬ雲に飛ぶ葉はむともまた変若ちめやも(巻5・847) <b>讃酒歌</b> ・駿なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし(巻3・338) ・なかなか人とあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ(巻3・343) ・あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る(巻3・344)
初夏 松浦郡を巡行。	<b>空想</b> ・松浦川川の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ(巻5・855) ・松浦なる玉島川に鮎釣ると立たせる子らが家路知らずも(巻5・856)
11月 大納言拜命。	
12月 帰京。	<b>別れ</b> ・倭道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島思ほえむかも(巻6・967) <b>亡妻挽歌</b> ・愛しき人の纏きてし敷栲のわが手枕を纏く人あらめや(巻3・438) ・京なる荒れたる家にひとり寝ば旅に益りて苦しかるべし(巻3・440) ・吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき(巻3・451) ・人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり(巻3・451) ・妹として二人作りしわが山齋は木高く繁くなりけるかも(巻3・452)
731年7月 死去。	<b>望郷</b> ・指進の栗栖の小野の萩が花散らむ時にし行きて手向けむ(巻6・970)

キャラクター設定の過程

おおとものたびと

大伴旅人 (2/2)

② 仮説、想像、創作

①の情報から想像を膨らませる。  
思いついたことをどんどん書く。

③ キャラ像決定



正三位なので黒の羅の頭巾、衣は浅紫。  
大宰帥は管理職だからおそらく文官の衣？

武人らしく少し無骨な印象の風貌が似あうかも。  
キリッと太い眉、目力強め。アゴやエラ、頬骨がやや目立つ。  
硬そうなヒゲ。見た目は威厳がある。  
酒は好きだが強いわけではなく、すぐ赤くなる。

大宰帥に着任したのは63歳頃。当時としては相当な高齢だったのでは。  
この人事については、長屋王排斥に向けて藤原氏により左遷されたという説や  
武人として有能だからこそ外交・防衛上の手腕を期待されたとする説がある。  
後者だったとしても、旅人が大宰府時代に残した望郷の歌の数々を見ると  
本人にとってはかなり不本意だったのでは。  
都から大宰府への移動が旅人の老体にはかなりこたえたのかも。

「自分ももう長くない」  
「死ぬなら故郷で死にたい」 みたいな。

漫画ではこの両説をちょっとずつ採用し、「旅人の能力は藤原氏からも高く評価されていたが、政治的には長屋王寄りの立場と見られていたため警戒された」という設定にしておきたい。

- ・一見やや無骨で威厳のある風貌。
- ・63歳にしては若い見た目
- ・有能な武人

・見た目に似合わず弱気で愚痴っぽく、寂しがりな一面あり。

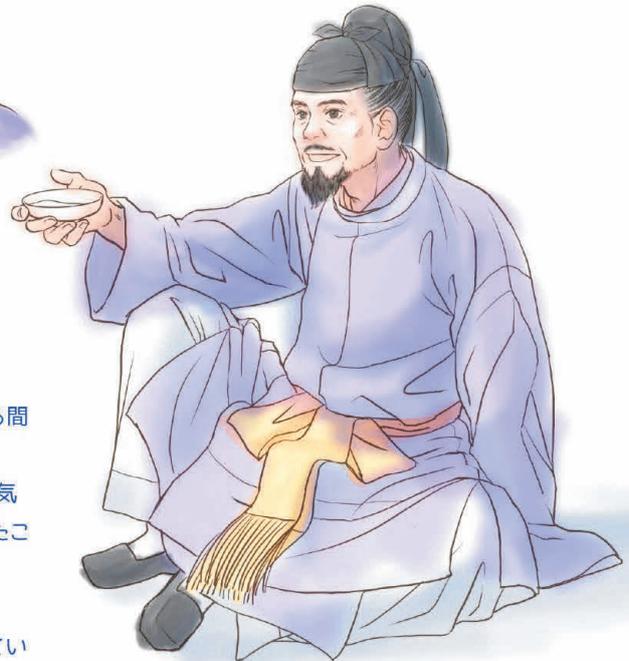
- ・気取らず威張らない。
- ・酒に酔うとすぐ赤くなり、時々部下に絡む。
- ・愛妻家
- ・時々架空の世界を空想して一人遊び

ギャップ萌え◎

部下との歌のやり取りを見ていると距離感がかなり近い。  
旅人が弱い一面を見せていたからこそ部下はとっつきやすかったのかも。  
あるいは奥さんを亡くして落ち込んでたから心配されてた？



大宰府で亡くなった奥さんを詠んだ歌は、大宰府にいる間より都へ戻る道中や自宅に戻った後の方が多い。  
大宰府で部下や友人に囲まれて仕事をこなしている時は気がまぎれていたのが、彼らと別れて都への帰路についたことで一気に喪失感が蘇ってきた？  
都に戻って1年もしない内に旅人自身も亡くなる。  
大宰府から帰る時点で旅人の気力・体力はあまり残っていなかったのでは。

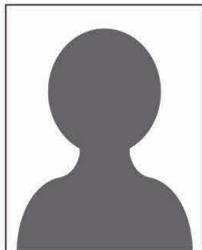


キャラクター設定の過程

やまのうえのおくら  
山上憶良

①情報収集

山上憶良 (660?-733?)



従五位下・筑前守  
68歳くらい  
(728年時点)

大伴旅人が大宰帥となった頃の筑前守。旅人の部下にあたるが年上。702年に遣唐使の少録として唐に渡り、儒教や仏教など最新の教養を身につける。筑紫歌壇の代表的歌人で、万葉集に約80首の歌を残す。官人でありながら社会的弱者の苦しみや悲しみなど、当時としては珍しいテーマの歌を詠んだ歌人として知られる。

代表的な歌

- 子どもの愛しさを詠んだ歌  
銀(しろがね)も金(くがね)も玉も何せむに  
勝れる宝子に及かめやも(巻5・803)  
訳: 銀も金も、玉とても、何の役に立とう。  
すぐれた宝も子に及ぶことなどあろうか。
- 宴を辞する際に冗談めかして詠んだ歌  
憶良らは今は罷らむ子泣くらむ  
そのかの母も吾を待つらむそ(巻3・337)  
訳: 憶良はもう退出しましょう。子どもが泣いているでしょう。  
その子のあの母親も私を待っているでしょうよ。
- 妻を亡くした大伴旅人に成り代わってその悲しみを詠み上げた「日本挽歌」
- 困窮する民の苦しみを歌った「貧窮問答歌」

②仮説、想像、創作



従五位下、衣の色は浅緋。  
毛足の長いたれ眉とたれ目。  
全体的に細長い顔。  
基本的に柔和な表情。  
文官らしく体の線が細い。  
髪とヒゲは白髪の方が多く、  
髪質も旅人より柔らかい。



相手に成り代わって詠むスタイルの歌も。  
歌をもらった相手は戸惑うこともあったかも…?  
他人に共感しやすい割に  
そういう想像力にはちょっと欠ける。

旅人も想像を膨らませてファンタジーな歌を詠んだりしてたので気が合ったかも。

③キャラ像決定

68歳って当時としてはかなりのおじいちゃんなのでは?  
老けた見た目だが「まだまだ若い者には負けません」という意欲がある。旅人よりも元氣。

高い教養。  
理屈っぽく説教くさい独特な歌も多いが本人は無自覚。

身分の差に対して比較的無頓着。  
相手の身分に関わらず、  
その人の境遇や気持ちを想像して共感しやすい性質。

上司である旅人にも堂々と接する。  
奥さんを亡くして弱ってる旅人を年長者としていたわりたいたいという兄のような感情か?



キャラクター設定の過程

おおとものいらつめ

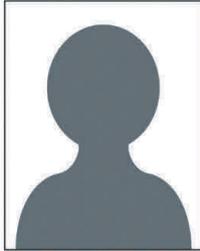
大伴郎女

①情報収集

②仮説、想像、創作

③キャラ像決定

大伴郎女 (?-728)



※「郎女」は個人の名前ではなく、「〇〇さんの家の女性」程度の意味。

大伴旅人の妻とされる女性。帥として大宰府に赴任する旅人に同行し、現地で亡くなったと考えられている。(※明確な記述はなく、巻5の「報凶問歌」と序、続く憶良の悼亡詩文「日本挽歌」の研究による推定) 旅人が亡き妻を偲ぶ歌(亡妻挽歌)が万葉集に多く残されている。

旅人が亡き妻を偲んで詠んだ歌

- わが岡の秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも(巻8・1542)

訳: 我が家近くの岡の秋萩の花は風がはげしいので、散りそうになってしまった。見る人もあってほしい。

- 還るべく時は成りけり京師にて誰が手本をかわが枕かむ(巻3・439)

訳: いよいよ還るべき時になったことだ。しかし都で一体誰の腕を私は枕としよう。

- 吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人ぞなき(巻3・446)

訳: わがいとしい妻が往路に見た鞆の浦のむろの木は、長く命を保っているのに、見た妻は今はいない。

- 吾妹子が植えし梅の樹見ることこころ咽せつつ涙し流る(巻3・453)

訳: わが妻の植えた梅の木を見るたびに、心もむせかえるばかりに涙の流れることよ。

文献はあまり残っていないので、創作の割合は多くならざるを得ない。名前が分からないのは漫画キャラとしてはツライ…。



生年不詳なので年齢も都合よく創作。現代人が共感しやすいよう「長年連れ添った老妻」にしたい。50歳くらい?

家に帰ってこの人の顔を見るとホッとするような、のんびりした癒し系の女性。殺伐とした政治の世界の対極にあるような人。

家持らの生母ではないと見られる。家持と旅人の年齢差が大きいことから、漫画の中では大伴郎女の間には子供ができなかった、という設定が自然か?

実子ではなくとも、家持の養母として大切に養育していたと思いたい。



決して美人ではないがおっとり・のんびりした心優しい女性。いつもニコニコしている。丸顔に丸くて低い鼻、ぼちゃっとした唇。全てのパーツが丸っこい。

庭いじりが趣味。

都の自宅の庭に梅の木を植えたり、旅人の大宰府行きに同行する際にも旅先に生えている植物を一つ観察したりする癖がある。

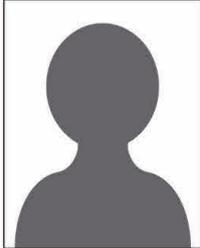
そのため、この人が亡くなった後の旅人は、花や草木を目にする度に奥さんのことを思い出してしまう。



キャラクター設定の過程 おおとものさかのうえのいらつめ  
大伴坂上郎女

①情報収集

大伴坂上郎女 (?-?)



※「郎女」は個人の名前ではなく、「〇〇さんの家の女性」程度の意味。

大伴旅人の異母妹、家持の叔母。十代で穂積皇子に嫁ぐが715年に死別。養老年間、藤原麻呂と相聞歌を交わす。

721年頃、異母兄である大伴宿奈麻呂に嫁ぎ、坂上大嬢と二嬢を出産(大嬢は後に家持の妻となる)。

万葉集に約80首の歌を残す(女性最多)。青年時代の家持・大嬢に歌の手ほどきをしていた。

大伴家を取り仕切った女性。

※坂上郎女が大宰府の旅人邸から都へ帰る途中に詠んだ歌が巻6・963に収録されている。

代表的な歌

・藤原麻呂と交わした相聞歌

来むといふも来ぬ時あるを来じといふを  
来むとは待たじ来じといふものを  
(巻4・527)

訳: 来ようといったって来ない時があるものを、  
来られないだろうと知っているのに来るだ  
ろうなどと待ってはいますまい。  
来られないとおっしゃっているものを。

・娘婿に送った歌

玉主に玉は授けてかつがつも枕とわれはい  
ざ二人寝む(巻4・652)

訳: 玉守のあなたに玉は授けて、ともかくも、  
枕と私は、さあ二人で寝ましょう。

②仮説、想像、創作



生年不詳なので年齢も創作。  
娘が家持の妻となるので、  
その親世代だとすると20代後半～  
30代前半くらいが自然か。



数少ない若い女性キャラとしては  
美人に描きたいところ。

気の強そうなキリッとした眉、  
ややつり目。  
鼻筋が通っており、鼻先や顎も  
ツンととがっている。

家持と大嬢に歌の手ほどきをし、時に娘の歌の代筆をすることもあった。

世話焼き母さん。

③キャラ像決定

夫・大伴宿奈麻呂との死別後に旅人が駐在する大宰府へ赴き家持を養育した、という説あり(ただし根拠となる文献資料はない)。  
漫画の設定としてはこの説に拠りたい。

何でもハッキリものを言うので人見知りの家持を最初はビビらせた、みたいなエピソードが欲しい。

ただし大宰府時代にこの人が詠んだ歌は残っていないので、この漫画では「存在感のあるわき役」どまり。

テキパキと仕事をこなす才女。  
社交的で頭の回転が速い。  
男性に対しても堂々と接し、  
恋愛にも積極的。  
相手の男性をタジタジにさせることも。



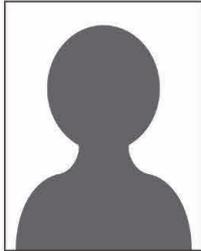
キャラクター設定の過程 おおとものやかもち  
大伴家持

①情報収集

②仮説、想像、創作

③キャラ像決定

大伴家持 (718?-785)



(718年誕生説に拠れば)  
旅人の大宰府赴任時は  
10歳前後

大伴旅人の息子で、後に大伴氏の長となる。生母は不明。

旅人が帥として大宰府に赴任する際に同行したか。叔母である大伴坂上郎女から歌の教育を受ける(※)。

後に奈良時代を代表する歌人に成長。万葉集に収められている家持の歌は全体の1割超の約480首に及び、万葉集の編纂に大きく関わった人物とされている。

少年期から多くの女性と相聞歌を交わしており、妻には大伴坂上郎女の長女・大嬢を迎える。

政治的にも波乱の多い人生を送った。

代表的な歌 (大宰府時代より後の作)

- ・ 自然を詠んだ雑歌 (恋の歌のようにも見える)  
振仰けて若月見れば一目見し人の眉引  
思ほゆるかも (巻6・994)

訳: 空遠くふり仰いで三日月を見ると、一目だけ  
みた人の引き眉が思われることよ。

※ 巻6・993で大伴坂上郎女が、  
巻6・994で家持が同じテーマ(初月の歌)を  
詠んでいるので、郎女が手本の歌を詠み、家持  
に歌の手ほどきをしたか、という説がある。

略歴や歌を読んでもなかなかキャラ  
が固まらない……。

いっそミステリアスな人物  
として描くか?



718年誕生説に拠るなら、  
旅人の大宰府赴任時は10歳前後。

子どもらしい澄んだ瞳と三日月のような  
きれいなカーブの眉。ふっくらした頬。  
女の子のような可愛い顔。



人見知りだが、実は大人達の  
言動を細かく観察し、正確に  
記憶している。時間が経って  
もほとんど忘れない。

この時代の子供の服装は???  
動きやすくだけた格好の方が  
子供らしいが、  
貴族の子息なのであまり粗末な  
服は着せたくない。  
大人の朝服を簡略化させたぐら  
いが自然か?

\* 旅人の大宰府赴任に家持も同行した  
前提での設定

将来万葉集の編纂に深く関わるとされる  
重要人物なので、漫画の中でも一定  
の存在感は発揮してほしいが、大宰府  
時代はまだ子供。  
その頃に詠んだ歌も残っていないので  
この漫画ではわき役。

傍観者としてナレーションを担  
当してもらうのも良いかも。



(万葉文化館研究員の皆さんのご意見)

- ・ この家持が着ている服は朝服 (官人が朝廷に出仕する時に着る衣) の形をしており、この形の衣を子どもが着るのはあまり考えられない。
- ・ 古代の女びと (皇族や貴族を除く) の日常の服装は基本的には貫頭衣、もしくはそれに準じる簡易な衣で、膝下を覆うような袴を履くのも出仕する時など、限られた時だけだったという説がある。
- ・ しかしそれも大人の話で、子どもについてはやはり資料がなくてはっきりしない。
- ・ 貴族の家柄の、しかも大宰府長官の息子が貫頭衣を着ている…ということもないだろう。上の衣を脱がして下の衣だけを描く、というのは下着姿だからマズいだろう。

ということで、結論として今のままで良いのではないかと  
足元はわらじか白木のくつぐらいいい。

キャラクター設定の過程

大宰府の仲間たち

①情報収集

おののおゆ

小野老 (?-737)

旅人が大宰帥となってほどなく  
(729年頃)大宰少弐として赴任。

(官歴)

時期不詳：正六位下

719年 従五位下

729年 従五位上

731年 正五位下

733年 正五位上

734年 従四位下

②仮説、想像、創作

長屋王の変の前の約10年間は昇進がなかったのに対し、政変後は1、2年置きに順調に昇進。藤原氏寄りの人物か？旅人を「政治的に長屋王寄り」という設定にするなら、この人との間にやや緊迫した雰囲気演出できるかも。

- ・キツネっぽい顔
- ・眉尻が上がっている
- ・切れ長の目
- ・鼻・顔が細い
- ・唇薄い
- ・良い人にも悪い人にも見える笑顔



さみまんせい

沙弥満誓 (生没年不詳)

笠沙弥とも。元は従四位上の右大弁であったが、721年に元明天皇の病氣平癒を祈願するために出家。俗名は笠麻呂。

723年に観世音寺の造寺司として筑紫に赴任。

先に帰京した旅人へ、女性から男性への恋歌のような内容の歌を贈っている。僧でありながら俗っぽいおふざけが好きだった？そういうやりとりができるほど旅人とも親しかったか。場の空気を読んでうまく立ち回ることができる人。

- ・丸い顔と鼻
- ・たれ眉
- ・つぶらな瞳
- ・アヒル口
- ・アゴ引つ込んでる



こしま

児島 (生没年不詳)

旅人と親交があったらしい、筑紫の遊行女婦(うかれめ)。

都へ帰る旅人に対し、愛しい人との別れを嘆く歌を送った。

児島が旅人に歌った愛の歌と、それに旅人が返した歌には、かなり温度差があるように思える。児島の片思いだったのかも？

- ・若い頃の太伴郎女に少し似ている(でも児島の方が美人)
- ・ふっくらした頬
- ・ふわとした眉
- ・ぼったり厚みのある唇



キャラクター設定の過程

長屋王と藤原四兄弟

①情報収集

ながやおう

長屋王 (684?-729)

太政大臣・高市皇子の長男。729年時点で正二位、左大臣。天皇の外戚として政治を主導したい藤原氏からすると目障りな存在だったと思われる。729年、長屋王が謀反を企んでいるとの告発を受け、妻の吉備内親王とその子どもども自殺に追い込まれた。

②仮説、想像、創作

長屋王本人の野心はそれほど強くなくとも、藤原氏に反発する勢力にとっては求心力のある存在。気骨はあるが頑固で、敵を作ることもしばしば…という設定。

- ・頑固そうなまっすぐ眉。
- ・眉尻に向かって細くなる
- ・やや寄り目
- ・シワ深い
- ・きれいに整った口ひげ

③キャラ像決定



ふじわらのふささき

藤原房前 (681-737)

藤原不比等の次男。藤原北家の祖。藤原四兄弟の内、房前だけは長屋王の変の陰謀に関わっていない説がある。根拠は、  
・長屋王の変における房前の行動記録がない  
・長屋王の変の後に昇進がなかった  
・死の床の元明天皇が長屋王と房前の二人を召して後事を託したという記録から、政治的な考え方は長屋王に近かった可能性がある 等。

旅人が長屋王の変後の729年10月に房前へ贈った「梧桐日本琴の歌」からは、房前に対する親しみが感じられる。旅人を「長屋王寄りの人間だった」と設定するなら、この漫画では左の説を採用したい。

- ・穏やかな人柄
- ・山型の眉
- ・両目離れ気味
- ・鼻先上がり気味
- ・先が三角にとがった顎ヒゲ



ふじわらのむちまる

藤原武智麻呂 (680-737)

藤原不比等の長男。この人が長屋王の変の首謀者と見る説が多い。変の1か月後に大納言に昇進。藤原南家の祖。

- ・名前のイメージそのまま
- ・The 無骨
- ・太い三角眉
- ・両目離れ気味
- ・大きな団子鼻
- ・ヒゲもじゃ



ふじわらのうまかい

藤原宇合 (694-737)

藤原不比等の三男。長屋王の変では軍事面で主要な役割を果たす。長屋王の変の一年半後に参議に昇進。藤原式家の祖。

- ・まっすぐ眉。
- ・眉尻に向かって太くなる
- ・両目離れ気味
- ・鼻筋通ってる
- ・口ひげうっすら



ふじわらのまる

藤原麻呂 (695-737)

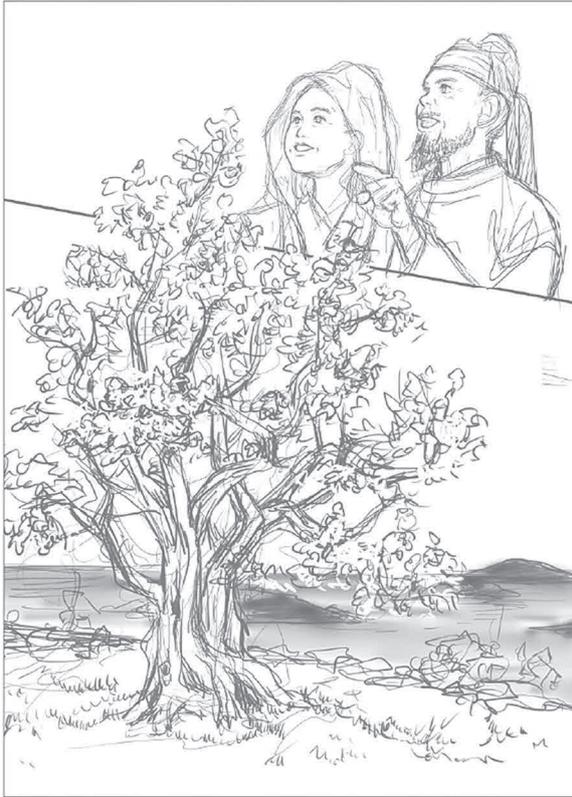
藤原不比等の四男。長屋王の変の一か月後、正四位上から従三位に昇進。一年半後には参議に。藤原京家の祖。坂上郎女の元カレか。

坂上郎女の元カレ説があるので、実は武智麻呂兄ちゃんが交際に反対した…という設定入れる？

- ・気弱そうな三角のたれ眉
- ・両目離れ気味。 ややつり目
- ・小さめの団子鼻
- ・丸顔







## 場面1 大宰府への往路

### 鞆の浦のムコの木を旅人夫妻が眺めるシーン

旅人の亡妻挽歌「吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき」（3巻・446）から、大宰府への往路での旅人夫妻の様子を想像して描いたもの。

往路の様子を描く上で、以下の疑問が浮上。

- ・ 移動手段は陸路か海路か？
- ・ 陸路の場合、どんな乗り物（籠？馬？）に乗るのか？
- ・ 海路の場合、どんな船に乗るのか？
- ・ お付きの家来は何人くらいか、どのような服装か？
- ・ 当時の旅装束はどのようなものか？防寒具は？

鞆の浦は潮待ちの港として栄えた場所なので、旅人夫妻も海路で大宰府へ移動し、その道中で鞆の浦に滞在したものと仮定。港付近を散策している最中に「ムコの木」に目にとまったか。

左のラフ画は旅人夫妻の顔のアップとムコの木のみを切り取り、できるだけ上記の疑問点をこまかく描き方をしている。ストーリー漫画として仕上げるのであればこの前後のシーンも描くことになるので、調べて分からない部分を想像で補う作業（船や旅装束などのデザイン等も含む）が必要となる。想像で描くとしても、リアリティのある画面にするためにはその前後の時代の資料をさらに集めて参考にする必要がある。

（万葉文化館研究員の皆さんのコメント）

- ・ 陸路と海路、いずれの可能性もあるが、鞆の浦は山陽道駅から外れた場所にあるのでこの場合は海路が適当か。ただし大宰少監正六位上の人物が播磨国を通過し食料を支給された記録があり、その人物は陸路だったとも考えられる。
- ・ 船の資料としては吉備大臣入唐絵巻または船形壱輪、壱輪の線刻等を参照。
- ・ 従者の数は12～60人程度か。三位の官人には60人の舎人が充てられるが、その全員が大宰府に同行したかは不明。都の邸宅にとどまる者もいたかも。
- ・ 舎人の衣は初位の官人（朝服）または庶人（制服？）。家人は黒い服。
- ・ 旅装束については現時点で明確な資料なし。



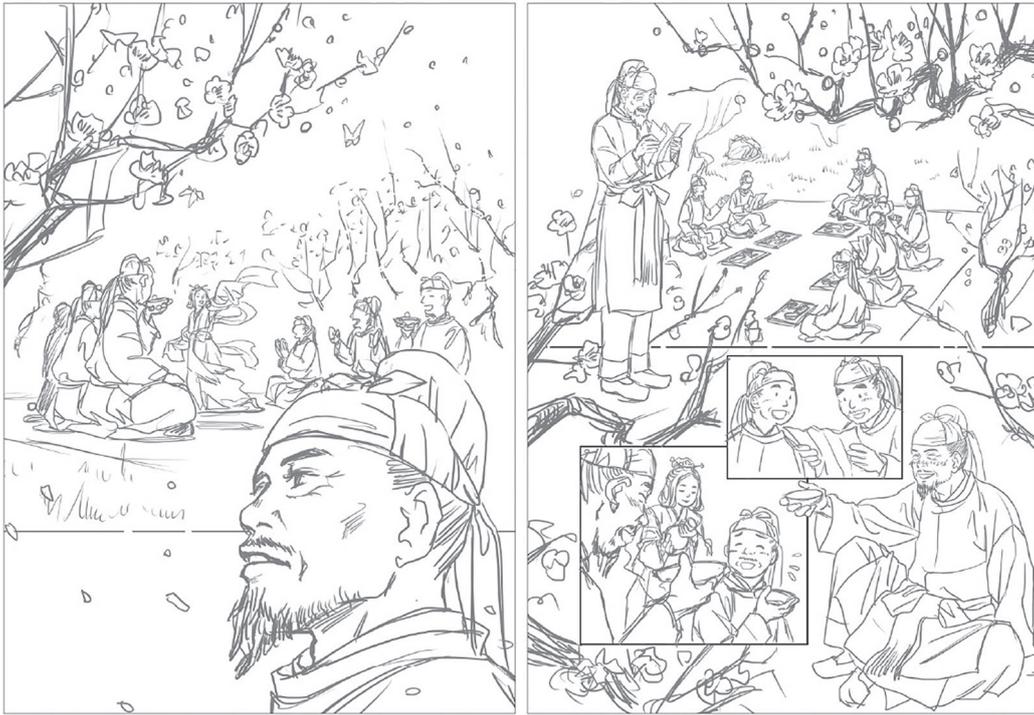
## 場面2 庭を眺める旅人

大伴娘女の死後、ほんやりと庭を眺める旅人の様子。

旅人の「亡妻挽歌」では、季節の草花を見る度に亡き妻を思い出しているようなので、亡くなった奥さんはきっと庭が好き人だったのだろうと想像。

日中は部下に囲まれて仕事をしているので気もまぎれているが、一人で一人になった時には奥さんがもういないことを意識せざるを得ないのでは。普段ニコニコと冗談を飛ばすひょうきんな父と、一人で庭を眺めている時に見せる「素」の父の顔の違いに、息子の家持が気づいてハッとすると…みたいな場面。

奈良時代の貴族の邸宅がどのようなものかわかりかねたので、平城京左京三条二坊宮跡庭園を参考とした。



### 場面3 大宰帥邸での梅花の宴

新元号「令和」が発表されたことで注目を集めた「梅花の宴」の様子。

絵にする上で以下の疑問が浮上。

- ・出席者の席次は？
- ・まだ寒い季節だと思われるが防寒具は？
- ・歌を発表する際は立って詠むのか、座ったままでよいのか？
- ・歌は予め紙などに書いてくるのか、その場で即興的に詠みあげるのか？
- ・食事はどのように提供されるのか？どんな食器にどんな料理が盛りられるのか？
- ・服装は普段の仕事の時よりは略式なのか？（刀なども描くべきか？）

梅花の宴は「令和」で話題になったため、2019年はそれを再現したイベントが大宰府で開催された。大宰府展示館で展示されているジオラマや、「万葉集全20巻朗唱の会にいざなう会」が高岡市に寄贈した模型などもニュースとなり、その写真をかなり参考とした。

(万葉文化館研究員の皆さんのコメント)

- ・梅花宴の席次については諸説あり、明確なことは不明。
- ・防寒具についても不明だが、官人の衣はかなりゆったりした構造なので、外側ではなく内側に着込んでいた可能性はゼロではない。
- ・歌を発表する形式については詳細不明。
- ・当時の食材や食器については、出土品や木簡の記録からある程度の推測が可能。当時の食事を再現した資料写真なども存在する。貴族の食事は品数が多く珍味も含み、食器も漆器や金属器などの豪華なものだったとされる。



## 万葉集に取材した短編漫画の可能性の模索（みしま）

以上が、大伴旅人を主人公とした短編漫画の企画提案のために制作した資料である。当初は16Pぐらいの漫画を実際に描いてみようと思気込んでいたものの、旅人を語る上では外せない妻・大伴郎女の名前が分からないこと、大伴家持の実母が誰なのか文献から確認できないこと等、人間関係を描く上で重要な情報が欠けていることがネックとなり、実際に漫画を描くには至らなかった。通常の娯楽作品であれば、あくまでもフィクションとして、欠けた情報は自分の想像で補いながら漫画として仕上げる必要があるが、奈良県立万葉文化館の委託共同研究の成果物として世に出す以上、読む人が史実とフィクションを混同するようなものを公開すべきではないと判断し、「企画」段階でとどめた次第である。

このようにして、万葉歌、あるいは万葉歌人に取材した短編漫画の可能性を模索してきた。単なる学習漫画ではなく、娯楽として面白い短編漫画に仕上げることができれば、奈良県立万葉文化館の展示コンテンツとしても魅力を発揮できると考えるが、導入にあたっては反対する向きも少なからず出てくると予想する。漫画から得られる情報は読者の記憶に残りやすい反面、イメージが固定されてしまい、読者の想像の余地が大幅に減ってしまうというデメリットもあるからである。研究機関の展示物として、フィクションをどこまで許容するのが大きな争点になるだろう。

### 参考文献

- 中島真也『コレクション日本歌人選 041 大伴旅人』笠間書院、2012年
- 角川書店 編『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 万葉集』角川ソフィア文庫、2001年
- 野村忠夫『律令政治の諸様相』吉川弘文館、1968年
- 増尾伸一郎『万葉歌人と中国思想』、1997年
- 瀧浪貞子『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版、1991年
- 大山誠一『長屋王家木簡と金石文』吉川弘文館、1998年
- 直木孝次郎『歴史文化ライブラリー 94 万葉集と古代史』吉川弘文館 2000年

